

六三四九 「正形」 夫れ物の物を爲すや。神は體に於て活す、

六三五〇 體は神に於て立す、

六三五一 活は、没中に見るれば則ち通ず、露中に見るれば則ち動なり、

六三五二 立は、没中に隠るれば則ち塞る、露中に隠るれば則ち靜なり、

六三五三 其の塞靜は罅縫を没す、

六三五四 通動は條理を露す、

六三五五 通動塞靜は。理に由りて形を成す。

六三五六 理は道路を通じて。而して氣は必ず此に従いて布く。

六三五七 氣の布く所は。正斜自ずから形を成す。

六三五八 時は經通す、

六三五九 處は緯塞す、

六三六〇 體は自ら靜す、

六三六一 氣は能く動く、

六三六二 之を均しくすれば則ち通なる者は天の動なり、

六三六三 塞なる者は天の靜なり、

六三六四 動なる者は物の通なり、

六三六五 靜なる者は物の塞なり、

六三六六 物中。體は天地を成す、故に靜なり、

六三六七 氣は轉持を成す、故に動なり、

六三六八

* 六三六九 氣體相い得て。而して天地は動靜す。故に

六三七〇 靜なれば則ち天圓地直なり、

六三七一 處は止りて終に圓なり、

六三七二 時は行きて終に直なり、

六三七三 圓は以て直を持し、中より表裏を分つ、表裏分ち難くして、而して一圓物を混成す、

六三七四 直は以て圓を運す、今より前後を分つ、前後分ち難くして、而して一逝時を滾成す、

六三七五 環守は南北を爲す、
(PB 425)

六三七六 運轉は東西を爲す、

六三七七 逝く者は前後を爲す、

六三八〇 旋る者は歳日を爲す、故に

* 六三八一 圓象の旋りて復するは、譬えば循環して走り、往けば則ち復り、復れば則ち往き、

六三八二 終に端緒無きが若し、

六三八三 直象の往きて返するは、譬えば繩を以て之を矩し、繩盡きて直盡きずに

六三八四 引きて其の止る所を見ざるが若し。
(I 447b)

六三八五 動なるや則ち轉規守矩なり、

六三八六 上下 虚實を以て分つは、體の天地なり、虚實相い分てば、則ち直圓は混成す、

六三八七 内外 轉持を以て分つは、氣の天地なり、轉持相い分てば、則ち規矩は絜立す、是を以て

六三八九 轉持の間。轉は外を爲し、天は其の處を成す、而して象は其の中に居る、

六三九〇 持は内を爲し、地は其の物を爲す、而して質は其の上に居る、

六三九一

六三九二

六三九三

六三九四

六三九五

六三九六

六三九七

六三九八

六三九九

六四〇〇

六四〇一

六四〇二

六四〇三

六四〇四

六四〇五

六四〇六

六四〇七

六四〇八

六四〇九

混成こんせいより之これを觀みれば、
 則すなわち持直ぢちよくは外がいに向むかいて圓えんなり、
 絜立せんりつより之これを觀みれば、
 則すなわち豎矩じゆくは中ちゆうを貫つらぬいて規きなり、
 天地てんちを分わかてば、
 則すなわち轉持てんじは合がつ、

天體てんたいは自おのずから虚きよなり、
 地體ちたいは自おのずから實じつなり、
 轉てんを貫つらぬいて直ちよくなり、
 持じに徹てつして圓えんなり、
 動どうを以もつて形けいと爲なさず、
 直圓ちよくえんは混成こんせいす、
 轉持てんじを分わかてば、
 則すなわち天地てんちは合がつ、
 轉氣てんきは自おのずから精せいなり、
 持氣じきは自おのずから麤そなり、
 地ちを貫つらぬいて矩くを爲なす、
 天てんを轉てんじて規きを爲なす、
 靜せいを以もつて形けいと爲なさず、
 規矩きくは絜立せんりつす、

靜せいは動中どうちゆうに塞そくす、
 動どうは靜中せいちゆうに通つうず、
 動どうを容いるるの靜せいは、
 靜せいにして跡無せきなし、
 故ゆえに

六四一〇 之をして動かしむれば、則ち東西を碍てず、升降を妨げず、

六四一一 静を用うるの動は、動きて處を守る、故に

六四一二 之をして止らしむれば、則ち南北は軸を爲し、内外は位を守る、

六四一三 天地の性。二は能く合す、

六四一四 一は能く分つ、

六四一五 天地は静を成す、

六四一六 轉持は動を成す、而して

六四一七 動静は。同じく其の形を圓にす、

六四一八 同じく其の理を直にす、唯だ

六四一九 其の理は。動すれば則ち斜なり、

六四二〇 静すれば則ち正なり、

六四二一 然らざること能わずして然り。

六四二二 圓なる者は形なり、而して動の體を成す者なり、故に

六四二三 塊然として能く物に於て形す、故に其の内は包んで以て容るに足る、

六四二二三 2 (復元) 其の外は循いて以て環る可し、

六四二四 塊岐方扁は、種種の異形と雖も、而も

六四二五 1 2 居る者を内に統べ、行く者を外に環らす可きに於ては、

六四二六 則ち同じく塊然の體を圓に歸するを失せず、

六四二七 直なる者は理なり、而して氣の路を成す者なり、故に

(PB 426)

六四二八1 遂乎として能く物に於て理す。故に

六四二八2 (復元) 其の中は、湊まるに足り路するに足る。其の外は、轉ず可し持す可し。故に

六四二九 横豎邪曲は、千萬の態有りと雖も、而も

六四三〇 活を本に畜え、氣を末に施せば、

六四三一 則ち 遂乎の理を直に歸するに失せず。此の故に (六四二六の対の文。)

六四三二 直は氣を體に於て運す可し、

六四三三 圓は形を體に於て成す可し。是を以て

六四三四 道は理に由りて有る、道即理なるに非ざるなり、

六四三五 體は形に由りて成る、體即形なるに非ざるなり、

六四三六 姑且 小を以て大を喩えんか。夫れ

六四三七 動の身首羽毛に於ると、

六四三八 植の根幹華葉に於ると、

六四三九 體は則ち相い似たり。

六四四〇 禽を爲し獸を爲す。艸を爲し木を爲す。散じて萬品と爲るに至りては。

六四四一 則ち何を以てか分つを爲さん。蓋し形の異を爲すや。

六四四二 氣の布に従う。氣の布く所は。乃ち理の在る所なり。

六四四三 理は。動に於ては脈と曰う。

六四四四 植に於ては文と曰う。

六四四五 玉に理と曰う。

(I 448a)

六四四六
 六四四七
 六四四八
 六四四九
 六四五〇
 六四五一
 六四五二
 六四五三
 六四五四
 六四五五
 六四五六
 六四五七
 六四五八
 六四五九
 六四六〇
 六四六一
 六四六二
 六四六三
 六四六四

石に砌と曰う。

山水に脈と曰う。

轉持に規矩と曰う。

活性は此より連す。

形體は是に於て成る。

氣は動に依りて通じ、體は實するを以て露す、

位は靜に依りて立ち、形は虚するを以て成る、

既に是れ靜虚なれば。形位は奚れを以てか見る。

夫れ行路の人の若き。高下は其の地に由る。而して

路圓なれば則ち行も圓なり。路直なれば則ち行も直なり。

是に於て圓は運轉の爲す所に非ず。

直は升降の爲す所に非ざるを觀る。

理は則ち正直斜矩なり、

形は則ち正圓斜規なり、故に

形なる者は理の成る所なり、

理なる者は形の立つ所なり、

是を以て理正なれば形も正なり、直は圓を成す、

理斜なれば形も斜なり、矩は規を成す、

天地は圓以て直を含む

故に

(PB 427)

六四六五

轉守は規 以て矩を抱く、

六四六六

圓なる者は圓にして圓、其の形は毬の如し、

無垠は以て其の大を極む、

六四六七

直なる者は直にして圓、其の形は栗毬に比す、

六四六八

規なる者は圓にして扁、其の形は輪の如し、

運轉は以て其の横を成す、

六四六九

矩なる者は直にして立、其の形は車軸に比す、

幹守は以て其の豎を成すなり、

* 六四七〇―七一

持は垠る所有るを以て、而して直動の路は、

轉に至りて盡る、而して其の精靜は轉持と隔てず、

* 六四七二

轉は止る所有るを以て、而して平運の路は、

持に至りて無し、而して其の麓動は能く横豎を分つ、

* 六四七三

圓は能く直と混成す、精にして靜なり、

六四七四

矩は能く規と粲立す、麓にして靜なり、

六四七五

直は中より外を貫ぬけば、則ち止りて靜なり、

六四七六

矩は端より中に徹すれば、則ち旋りて動なり、

六四七七

矩は軸を爲す、

故に

六四七八

規は輪を爲す、

六四七九

規と矩と、同じく其の理を直にす、

六四八〇

圓は外を爲す、

六四八一

直は内を爲す、

六四八二

圓と直と、同じく其の形を圓にす、

六四八三

其の形を混成すれば、則ち經は衰として緯は塊たり、未だ直圓の痕を見さず、

六四八四

其の物を粲立すれば、則ち弥いよ規矩の體を變ず、

(PB 428)

(I 448b)